加藤智大さんと死刑囚表現展

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会「そばの会」
東京都荒川区南千住1-59-6-302
http://sobanokai.my.coocan.jp/

七月二六日朝、いわゆる秋葉原事件で死刑が確定していた加藤智大さんが、綾瀬近くの東京拘置所で死刑執行されました。安倍元首相の銃撃死という衝撃的な事件が起こってから一八日目、相模原障碍者殺傷事件からちょうど六年目にあたる日でした。

今回なぜ加藤さんが執行されなくてはならなかったのか、一〇八人いた死刑囚の中で彼は八六番目に死刑が確定しています。安倍元首相を襲撃した山上容疑者は四一歳、加藤さんは三九歳、ともにロスジェネ世代と呼ばれる年齢で、不安定な派遣労働を転々としてきたという共通点があります。法務省は、襲撃事件に衝撃を受けた多くの人が、過去に同様な事件を起こした加藤さんの処刑をすんなり受け入れると考えたのかもしれません。

日本の死刑廃止のために活動している「死刑廃止国際条約の批准を求めるフォーラム90」は、二〇〇五年から「死刑囚表現展」を開催しています。死刑囚の母として死刑制度の廃止を訴えてきた大道寺幸子さんが亡くなり、遺志を生かすために遺産をもとに基金が創設され、死刑囚の再審のための費用の援助と「表現展」の開催の費用に使われてきました。二〇一五年からは、冤罪の元死刑囚赤堀政夫さんから資金提供を受け「大道寺幸子・赤堀政夫基金」として再出発しました。

「表現展」には全国各地の拘置所にいる死刑囚から文章作品、絵画作品が送られてきます。

数人の選考委員が審査し、優秀作品は表彰され、審査の過程が書かれた小冊子が応募した個々の死刑囚に届けられて、死刑囚との紙上での交流が始まります。

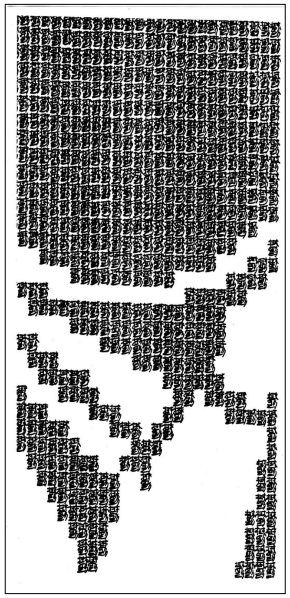
死刑囚たちの作品は海外でも評価され、今年初めから一二月末までパリの美術館で展示されています。

加藤智大さんは死刑が確定した二〇一五年から作品を応募してくるようになりました。

最初の作品は「パズル」と題され、画面の数字をヒントに升目を塗りつぶしていくと絵が浮かび上がるという仕掛けで、イラストロジック等とよばれており、選考委員も解き明かすのが難しいものでした。

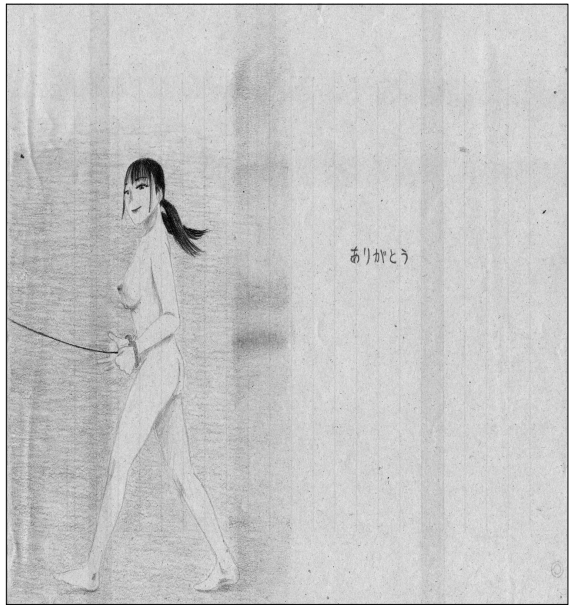
図版提供は全て大道寺幸子・赤堀政夫基金

二〇一七年にはさらに挑発的な作品を応募してきました。A4判の八一枚の用紙に描かれたイラストロジックはすべて「鬱」の字で埋められていました。選考会議の内容を読み、自分の作品は選考委員が好もしいと思う路線でない事を感じ取り、「自分の居場所はない」と表現したのです。



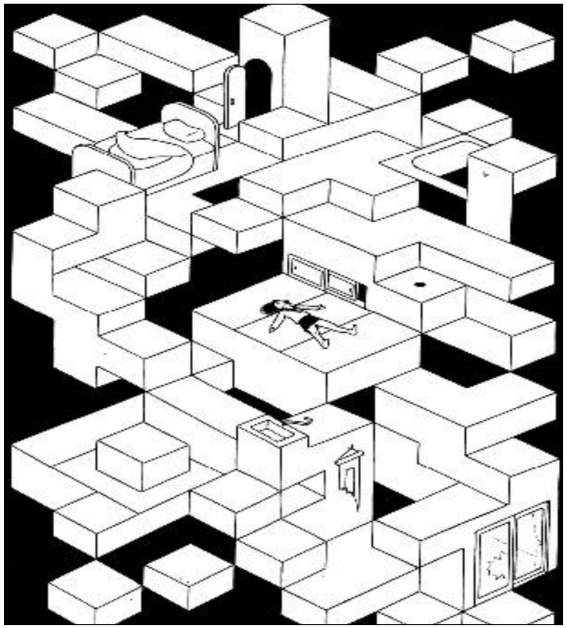
鬱↑

しかし、二〇一八年には微妙な変化が表れてきます。これまで他者を拒絶してきた加藤さんが、他の死刑囚の表現にエールを送る作品を送ってきたのです。加藤さんに連帯の意思表示が生まれてきました。



2022年6月　81枚の連作より「あとがき」

その後もこの傾向は続き、つらい思い出の多い故郷への郷愁を感じさせる作品や、孤独感にあふれる作品を投稿してきました。



2021年「お昼寝（14作全体のタイトル）より階段国道」

加藤さんは文章作品も応募していました。こども時代の親からの虐待体験を読み込んだ「人生ファイナルラップ」という作品は、韻を踏んだラップに乗せて「残り人生あと何周？」と繰り返されています。処刑された今、それを読むと何ともいたましい気持ちになります。

また、次のような短歌も詠んでいます。

・差し入れの現金深く感謝する外の暮らしも大変だろうに

・職員の口には出せぬ親切を目から読み取り頭を下げる

同じ境遇にある死刑囚に示された加藤さんの関心、連帯の気持ちは、現金を差し入れてくれる支援者や拘置所の看守の人たちへも向っています。表現展に応募するようになって七年、彼の精神的な変化が読み取れます。

今年行われた死刑囚へのアンケートに加藤さんは次のように回答しています。

「死刑囚表現展への応募が唯一といっていい生きがいであり、自由に表現できる場を確保してくださることに心から感謝を申し上げます。」

むごたらしい秋葉原事件を起こしてから一〇数年、その間に自己を見つめなおし変化してきた加藤さん。表現展への作品を創り、選考委員の言葉との交流を生きがいにしてきた加藤さん。

私たちはもう加藤さんの思考の過程をたどることはできません。遺作としてしか彼の作品に接することはできないのです。

「表現を通して自分の過去の過ちに気づいていることを示していた人間を、なぜ国家は殺す権限を持つのか、犯罪の被害者でもなく遺族でもない『国家』が突然現れて、人の命を奪う絶対的な権限を行使できるのか、人間としての『再生』に向けて歩んでいた加藤さんは、国家を代表する法務大臣の命令で殺されてはならなかったのです。」

表現展選考委員の太田昌国さんの言葉です。

（K）

あしたもがんばろう